

責任と自由

——「自由」な社会こそ人を「奴隷」化する——

檜 垣 良 成

これまで何度か学生たちとの〈対話〉の成果をまとめてきたが¹、2021、2022年度春学期の授業では、「責任」と「自由」について理解を深めることができた。相当鋭い発言が多く見受けられたので、備忘録も兼ねてまとめておきたい。

1 親の責任と自己責任

日本は現在、自由主義の国ということになっている。その場合、個人の自由な選択が認められるかわりに、その選択の責任は本人がとらなければならないはずである。ところが、齋藤雅俊『自己責任という暴力』でも指摘されているように、成人した子供の責任が親に問われることがある。齋藤氏は、これは子供の自由を奪うことであると指摘する。

自由な意思に基づく行動がルールに反するならば、彼は責めを負わなければならない。罰を受けるのは当然だ。しかし、同時に親が責任をとれば、行為者としての彼の自由は奪われてしまう。行為者としての責任をとることが彼の行動の自由を担保するからだ。大切なのは不始末を起こした子が自らの責任を自覚し引き受けることであって、子が納得する前に親が頭を下げてしまえば、行為者である子はあくまで親の付属物として甘やかされてしまうことになる。息子の行為は、息子自身が責任をとればいい。親も子も、それぞれが別個に責任を引き受けることでそれぞれの自由を獲得し、独立して生きていく権利をもつことができる (46)²。

これは、自由主義的に考えれば、至極当然の指摘である。子供が幼く親の「保護下」にある場合は、子供の行為の責任は親にもあるが、それは同時に、子供の自由（自由主義的意味での人権）が制限されることを意味する。だから、成人した子供に自由と人権を認めるなら、親は責任をとるべきではないのである。それなのに、日本ではまだまだ親の責任が取り沙汰される。また、グループの一メンバーの不祥事に対するメンバー全員の責任など、連帯責任や集団責任が問われる場面も少なくない。これは、日本ではまだまだ自由主

一七六

¹ 拙稿「対話と真理 教育とモラルの復興のために」、「トラシュマコスの呪縛「正解」信仰の深層」、「多様性」を叫ぶことの問題 とくに、日本の教育において」(筑波大学人文社会科学研究所哲学・思想専攻『哲学・思想論集』第40,44,45号、2015,2019,2020年)。

² 齋藤雅俊『自己責任という暴力——コロナ禍にみる日本という国の怖さ』未来社、2020年。引用文中の傍点は引用者による。

義が実現されていないということの意味するのであろうか。

しかし、その一方で、わが国でも「自己責任」という言葉はよく耳にする。2004年にイラクで武装グループに拉致された若者三人とその家族に対して「自己責任」追求の世論が盛り上がったことはまだ記憶に新しい。また、2015年に内戦下のシリアに入り、武装勢力に拘束されたフリーのジャーナリスト安田純平氏が、2018年になってやっと解放され、帰国した際にも、「自己責任」バッシングが起こった。これは、自由に伴う責任をとれということであって、わが国でも、実は自由主義が根づいているということの意味するのだろうか。いや、そうではないと齋藤氏は言う。この自己責任論は「退避勧告を無視してシリアに入り、拘束された安田の行動が周囲や国に迷惑を掛けたのだから、その責任をとるべきだ」(119) というものであり、自由主義とはむしろ対立する考え方だということである。

突き詰めて言えば、この自己責任論は共同体のルールを無視し、共同体に迷惑をかけた責任をとれと、共同体に所属する第三者が安田に迫っているということだ。つまり、共同体という集団からの逸脱を責めている。これは本来の自己責任とは異質なものだ。むしろ集団主義に起源が見出せる責任論だ。

つまり、「自己責任」バッシングで問題にされている責任とは、自分が引き受けるべき責任は自分が選んだことに対するもののみであるとする自由主義を前提とした責任論ではなく、責任とは基本的に集団に対するものであるとする集団主義に基づくものである。もちろん、この場合の責任は、連帯責任や、他者の行為に起因する意味での集団責任ではなく、あくまで安田個人の行為に帰せられているものではなく、それゆえ、「自己責任」の名で呼ばれるのであるが、自由な選択は称揚されておらず、むしろ、集団に従わなかったことに対する責任が問われているのである。集団を前提とするような「自己責任」という日本人の責任観については、太平洋戦争終結時に日本を分析したアメリカの人類学者ルース・ベネディクトも有名な『菊と刀』の中で既に触れている。

より大きな精神の自由〔freedom〕へのこの移行にあつて、日本人は、みずからが安定を保つのを助けうる一定の古い伝統的諸美德〔virtue〕をもっている。それらの一つが、「身から出た錆」に対するみずからのアカウントビリティとして彼らが表現するところの自己責任〔self-responsibility〕であり、これは人の肉体を刀になぞらえた比喩である。刀を帯びた者には刀の輝きを保つ責任がある。それと同じように、各人はみずからの行動の結果に対する責任を引き受けねばならない。各人は、みずからの弱さ、粘り強さの欠如、無能さからの当然の帰結すべてを認め、引き受けねばならない。自己責任は、自由なアメリカにおいてよりも日本において遥かに徹底的に解されている。この日本の意味においては、刀は侵略のシンボルではなく、むしろ、理想的で自己責任をわきまえた人の比喩となる。個人の自由を褒めたたえる体制においては、バランスをもたらすという点でこの〔自己責任という〕美德よりもベターなものはいない。そして、日本のしつけや行動哲学はその美德を日本人の精神の一部として植えつけた。今や日本人は、西洋的な意味で「刀を置く」ことを申し出たが、その

日本的な意味においては、鞘に収めた刀をいつも刀を脅かす錆からフリーにしておくという彼らの気づかひの点で彼らは不変の強さを備えているのである。美德についての彼らの表現においては、刀は、より自由でより平和な世界においても彼らが保ちうるもののシンボルである³。

ここで「自己責任」(self-responsibility)と呼ばれているものは、自分が引き受けるべき責任は自分が選んだことに対するもののみであるとする自由主義の自己責任ではないだろう。武士の義務はみずからが所属している集団におけるみずからの役割と無関係ではありえない。ただ、その義務をみずから主体的に果たすところに「自己責任」という言葉が使用されているように思われる。それでは、やはり集団を前提していると思われるこの「自己責任」は、「自己責任」バッシングで念頭に置かれている責任と同種のものなのだろうか。この問いに適切に答えるためには、まず齋藤氏が「本来の自己責任」と呼んでいる欧米の責任概念に対して、フランスの社会学者ポール・フォーコネが提示した議論を踏まえておくことが得策である。

2 スケープ・ゴートの責任と自己責任

自由意志に基づく行為の結果には責任が伴うというのが、自由主義的な責任の見方である。「本来の自己責任」は、まさしくこの見方を前提しているように思われる。自由な選択があってはじめて責任も生じるというのである。責任と罰との関係についても、責任があるから罰せられるという見方が通常の見方であるように思われる。ところが、フォーコネは逆であると言う。責任があるから罰せられるのではなく、罰する必要が生じたから、責任をどこかに設定する必要も発生したというのである。社会秩序が破られた場合に、社会に感情的反応が現われる。この民衆の怒りや悲しみを鎮め社会秩序を回復するために、この犯罪(社会あるいは共同体に対する侮辱ないし反逆)のシンボルを処罰するというのである⁴。したがって、処罰の必要が生じる前には責任は存在しないし、もちろんこの責任は行為が自由意志に基づいていたということの本質とするものでもない。すなわち、「自己決定・自己責任」という見方は、責任というものの本質を見損なっているということになるだろう。ある行為の結果の責任が問われるのは、その結果が社会において人の感情を逆なでするものだったからであり、しかも、どんな結果が社会秩序を乱すものと見なされ、何が犯罪のシンボルとして選ばれるかは、時代や文化によって変わってくる。したがって、責任とは個人の選択から自律的に成立するものなどではないということになる。このフォーコネの分析は、自由主義的な責任概念がいかに責任の本質を逸しているかを、よく説明しているのかもしれない。

そもそも、自由主義が言うような意味での「個人の選択の自由」という概念も、それほどまでに絶対視する意義が見いだされるような概念ではないと思われる。まず、ある行為

³ Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword Patterns of Japanese Culture*, 1946, ch. 12 last paragraph.

⁴ フォーコネの責任論については、齋藤前掲書 163 頁以下、小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会、2008 年、190 頁以下を参照。

の実行者が全く外部からの影響なしに選択できるとは思われず、また、その人の選択は、その人自身の性格等の内部原因にも大きく左右される。選択の決断の瞬間に、それらの要因を（参考にしながらも）あたかも断ち切ったかのような自律的な選択ができるという神話は、決定論の批判を待つまでもなく、きわめて不合理な想定と言わざるをえない。決定論に対立する意味での自由意志論を提唱する者は、自由意志なしには責任が消失してしまうことを心配するが、上で見たように、そもそも責任の本質は「まさにその人が選んだ」という点に存するわけではないのかもしれないのである⁵。もし「選択した」という一点に固執するのであれば、認知症の大人や未熟とされる子供の選択にも同じような責任を帰さねばならない。これらの場合は別だと言うかもしれないが、通常成熟した正常な大人と見なされる人々の間にも、どんな情報を与えられてきたか、どれだけの情報処理能力があるかという点だけを見ても、相違やグラデーションが見いだされるのであり、それにもかかわらず、一律に選択に責任をもたせることは不公平であるようにも思われる。

結局、自由主義的な「選択の自由」重視の社会は、フォーコネが言ったような犯罪のシンボル、すなわち社会の怒りを鎮めるためのスケープ・ゴートを、個人に集約させ、まさに「自己」責任として問い詰めることに拍車をかけるのであり、日本における「自己責任」バッシングも、決して西洋流の自由主義を履き違えた現象とは言い切れず、自由主義からの当然の帰結とすら見なしうるのである（欧米との違いは、何をもって社会の秩序が乱されたと見なすかの違いで説明できる）。

しかし、本当に責任というものはフォーコネが言うようなものに尽きるものであろうか。そして、自由主義の自由の問題があるとしても、自由という概念に意義を見いだす道はないのであろうか。

3 普遍的な価値を想定しないとどういうことか—付度社会の深層—

上で見たようなフォーコネの責任論に対して或る学生から次のような異議が提示された。

フォーコネの議論は普遍的な価値を想定していない点に問題があると思う。この議論では、正義に反する行為をしたから責任が追及されるのではなく、多くの人が秩序を乱されたと感じたから責任を誰かにとらせる必要性が生じるということになっている。そのため多数派が正しいことになり、善悪が多数決によって決められることになる。そのときには、秩序が乱されたことによる不安や喪失感といった感情が基準となっており、理性的に何が正しくて何が悪いことであるのかという基準には基づいていない。そうした多数派の感情によって少数派が圧殺される社会では〔普遍的な〕価値観が更新されない。みんなが多数派に対して従属するようになってしまうので、主

⁵ カントに即して「自由」概念を検討した拙稿がある。「自由な Willkür の自由——バウムガルテンからカントへ」（日本カント協会編『日本カント研究』第15号、2014年）、「選択と自由——カントにおける悪の根拠」（『哲学・思想論集』第39号、2014年）、「意志の自由とは何か——カントにおける絶対的自発性と純粋理性による規定」（『哲学・思想論集』第46号、2021年）。

体的にあるべき社会の姿を考えていこうとする意識がなくなってしまう。その結果として、責任が誰かに負わされるものだと考えられるようになるのだと思う。そうならないためには、一人一人が普遍的な価値を想定し、それに基づいて自ら納得して責任を引き受ける必要がある。現状の価値に納得できない時には、なぜ納得できないのか、どうしたら納得できるようになるのかみんなで考えて価値観を更新していかななくてはならない⁶。

この文章内に、フォーコネの責任論の問題点と、そこからの解放の道筋は既に示されていると思われるが、ここではまず、普遍的な価値を想定しないとは、どういうことを意味するのかをじっくり考えてみたい。

確かにフォーコネの責任論においては、人々が納得して積極的にその責任を担いたいと思うような普遍的な価値が想定されていない。もっとも、多数派の感情によって一定の価値基準が社会に台頭している状態であるとは言えるであろう。しかし、感情が相手では対立する感情をもつ者が納得する術はなく、原理的に、普遍性をもちえないのである。しかも、こうした感情的な価値の尊重については、人は受動的にならざるをえないという問題がある。この学生も言うように、皆が多数派の価値に従属するようになるので、この価値をみずから積極的に担い、また、更新して普遍的なよいものにしようという意識自体が失われるような責任論が、フォーコネの責任論である。

なるほど、自由主義社会では、個人の価値観が優先され、共通善は前提されないので、フォーコネにおいて普遍的な価値が想定されていないことに違和感はないであろう。しかし、個人の価値観が尊重されるという建前があったとしても、一人一人の価値観は違うわけだから、自由な社会の中ですべての人が他者との摩擦なしに自分の思うように生きることができるわけではない。その場合、人は実際のところ、どのように動くことになるのだろうか。

自由主義においては人が自分の意志に基づかないで集団に組み込まれることはない。そうすると、人々は自分のある目的に沿う限りで他人と合流していく。……その関係性の中では、他人とは自分の絶対的の外部ではなく協同のための機関に過ぎない。機関としての役割を超えて自分の内面を主張する他人は協同の邪魔であるから、集団から疎外される。自己決定・自己責任の共同体において、その疎外リスクを取ってまで積極的に集団に働きかけようとする人は少ないだろう⁷。

つまり、人々は世の中の流れを読み、自分の目的にその流れを利用しようと躍起になる。しかし、決してその流れそのものに対抗しようとはしないだろう。空気はあくまでも自分が利用するものであって、空気そのものに自身を賭ける価値があるわけではない。その流れそのものを確実に変えられる目算があれば話は別であるが、そうでないのに、それに

⁶ 2021年7月6日「哲学特講」に対する学生 K. H. のリアクションより。引用文中の傍点および〔 〕内は筆者による。

⁷ 2022年7月19日「哲学特講」に対する学生 M. U. のリアクションより。

異議を唱えることは全く何の意味のないことであるばかりか、自身に危害が及ぶ危険すら孕んだ愚行である。若者が保守的になったと言われて久しいが、このことは、普遍的価値を想定しない社会における必然と言ってよいのかもしれない。

個々人が自分の価値観をもって生きてよいとされる社会でも、人は他者からの承認なしに生きてゆくことはできない。しかし、自由主義社会においては、この承認は目の前の他者に、しかも表面的に求められることになる。

共通善のない社会で生きるということは、社会からの〔確固とした共通善のもとでの〕承認はまるきり得られないということである。社会からの承認を失った個人は、それゆえに以前にも増して目の前の他者の承認を求めている。しかし、その他者から本当の承認を獲得することはできない。というのは、彼はその他者と思想を共有することができないからである。というのは、彼は目の前の他者との間に共通善をもっていないため自分の内面が最終的に他者に受け入れてもらえるか不安で仕方ないからである。……こうして、個人が本当の承認を持っていないという意味での孤独が実際に今起きている。それで個人は仕方なく目の前の他者のかりそめの承認に甘んじることになる。……これが、われわれの年代が人間関係の歪みを自覚したとしてもそこから撤退できない理由である。このかりそめの関係が承認の最後の砦なのである。言い換えれば、かつては思想の共有の手段の一つに過ぎなかった他者との衝突は、われわれにとっては最後の承認の喪失なのである。大学一発目の哲学通論がつかったのも、これにある程度根があると思う⁸。

若い人たちの哲学〈対話〉がうまく機能しなくなったという実感をもって久しいが、この機能不全の主たる原因は、建設的な対立ができなくなったという点にある。上の学生はその背景を的確に指摘している。社会の大きな流れに対しても、目の前の他者に対しても、決して表立って対立しないことが、若い人たちが身をもって体得した人生の不文律なのである。この点は、一見すると、昔からの日本社会の特徴と軌を一にしていると思われるかもしれない。しかし、決定的な違いがある。それは共通善が前提されているかどうかである。以前の日本社会では、共同体のしきたりであれ、世間であれ、私たちが主体的に担い、自分の価値観をそこに重ね合わせてゆくべき或る程度普遍的な価値の存在が自明のものとして信じられていた。もちろん、欧米に比べると、その価値観に対して表立って対立を表明する人は少なく、現代の空気支配に近い状況が見いだされたと思われるが、それでも、その価値観を更新してゆこうとする力は現代日本よりはずっと強かったように見える。それは、逆説的であるように聞こえるかもしれないが、共通善の存在が信じられていたからである。みずからが提案することが、単に私個人の価値観の表明ではなく、共同体の全員がよりよく生きることができると確信できたからこそ、社会の大きな流れに対して、敢然と対立することができたのである。そもそも、共通善が存在しないのであれば、このような確信は不可能である。

⁸ 2022年8月2日「哲学特講」に対する学生 M. U. のリアクションより。

見放されないように、他者の顔色を窺いながら（顔色「しか」窺えない。思想に踏み込むつもりがない限り。）生きていく。残念ながら、この意味において一人になることを自己は受け入れることはできない。というのは、他者の承認という目印を失っても世界に錨を下ろせるほど自分が強くないことをわれわれはよく知っているからである。（これに関連して、一昔前の日本で「孤高」という生き方がありえたのは、たとえ実在の他者から距離を置いたとしても、共通の価値の中で生きる〔と信じられる〕限り、観念的な他者の承認を受けることができたからだ⁹。

普遍的な価値を想定しないということは、逆説的ではあるが、人を空気に対して奴隷化してゆくことにつながる。確かに、各個人は普遍的な価値に支配されることなく自由であると言っている状況は存在する。そして、決して空気に支配されているのではなく、それを主体的に利用しているのだと言い張ることも可能である。しかし、実際問題として各個人の価値観が対立する以上、世の中の大きな流れに逆らわず、それを利用することによってしか、みずからの欲求を充たすことはできない。利用すると言うと、主体的に聞こえるが、その流れに絶対逆らわないのである。世の中の流れは絶対に異議を唱えることができない前提であると認めつつ、なおかつ、それをみずからの価値観の実現そのものとは見なせない場合、人は世の中の流れにみずから隷従している状況であると言っても過言ではないのではないだろうか。世の中の大もとに対しては異議を唱えず、それに逆らわずにできる範囲で「自由に！」選択する生き方は、やがてじり貧状態に陥る可能性も高いように思われる。上に対しては異議を唱えず、下を見て「自分はまだまだ」と安心し、下の者が上がってこれないようにする（自分もそうされる）。そんな悪循環さえ起こりうるのではないか¹⁰。これらのことは、「近代的自我」を経験したことのない日本社会がリベラル化したことによる「付度社会」の成立という現象をよく理解できるものにしてくれる。しかし、現在権力を握っている人たちが本当に自分のことを考えてくれているのかどうかをよく見極めたほうがいいのではないだろうか。

4 とりによく責任と普遍的価値への自由

フォーコネの責任論における「責任」とは、あくまでも「みずからが進んでとりにいく」

⁹ 2022年7月26日「哲学特講」に対する学生 M. U. のリアクションより。

¹⁰ いつからか学生たちの動きがロボットのように見えてきた理由がこれで分かった気がする。新入生オリエンテーション等、参加が義務化されている催しには、相当かったるい内容でも高い出席率が見られるが、自由参加の催しには、参加して当然と推察される学生たちも参加しない。授業中に参考文献を紹介しても、誰も読んで来ない。もちろん、昔から皆が紹介した文献を読んで来ることはなかったが、授業に積極的に参加しているように見える学生には反応があったものである。しかし、今は授業中にそれなりの反応を見せていても、それが自発的に継続されることは稀である。授業中の様子はポーズだったのかと思わざるをえない。こちらからの働きかけに対する学生の反応は一様化しており、多様性がなくなったと感じる。趣味の世界は若者の間では相当多様化しているようだが、或る程度公的な行動は以前よりも一様化している。これは、本文で見た精神的奴隷化から読み解けば、よく理解できるように思われる。

ようなものではなく、他者に「とらせる」もの、あるいは、他者から「とらせられる」ものである。責任をとる者はスケープ・ゴートなのだから、当然である。それに対して、ベネディクトが言及した「自己責任」は、みずからが進んで果たすべき責任であるように思われる。彼女はこの責任を「美德」(virtue)と呼んでいる。同じように集団に対する責任に包摂される自己責任であったとしても、この違いは決定的であり、前節冒頭の学生が指摘するように、こうした違いは、普遍的な価値を想定しているかどうかによって由来する。

学生たちに「自己責任」という言葉の印象を聞くと、一様にネガティブな反応が返ってくる。イラク人質事件やシリアでの拘束事件での「自己責任」バッシングでも、責任はできるだけ忌避すべきものとして扱われている。企業のリストラなどで「自己責任」という言葉が使われるときなどが典型的であるが、こうした「自己責任」という語の用法は、集団からの排除が意図された使われ方である。先に、自由主義社会においては、世の中の大きな流れの中に居させてもらうことが各人の最大の関心事となることを確認したが、この関心事の最大の脅威が「自己責任」が追求されることであると言ってもよいかもしれない。

しかし、責任を回避し続けて人はよく生きることができるのであろうか。また、自由というものは、普遍的な価値を拒絶しながらも、空気に隷従することの中にしかないのであろうか。

自身の言動が、集団の空気のようなものによって（またそうして自分が奴隷化する事に依って）ではなく、主体自身によって表現できる事こそが、真の意味で自由である。（※言うだけ言えれば良いという意味ではない。それが共同体にとって大海の一滴のようであっても無視・拒絶・排除されてはならない、共同体に確かに還元されるという事が重要である。）ところでつまりここに責任が生じるのである。責任とは、何か事件の後に誰かに負わせる罰の儀式のようなものではなく、主体が、主体自身によって共同体に対して何かをなす時に（すなわち真に自由である時に）当然主体が引き受けているものであり、自由があるという事と責任があるという事はほぼ同義である。こうした責任を、我々は目指さなければならない。主体は、集団の漠然とした空気や流れに盲目的に隷従する道具としてではなく、共同体に対して主体自身の責任を行使する成員としてあるべきである¹¹。

普遍的な価値の存在を前提し、みずからが進んでその一翼を担うことが「とりにいく責任」であり、そのように担うことが「できる」ということが、私たち人間にも可能な「自由」であるように思われる。責任は、不都合な結果から因果的に追求されるものではなく、私たちには共同して担うべき目的があり、この目的の内容に即して各人に割り当てられているものと考えることができる。不都合な結果が生じてはじめて責任が生じるのではない。結果のいかんにかかわらず、はじめから責任はあると考えるのである。この目的となる普遍的な価値とみずからの価値観を分離しようとするとき、肯定的意味での「責任」も、空気への隷従の制限下でない「自由」も消失する。人が責任と自由を人生にとってよきものとするためには、普遍的な価値の想定は不可欠であり、そうした価値のもので

¹¹ 2022年7月26日「哲学特講」に対する学生Y.S.のリアクションより。

こそ、人はみずから進んで責任を担えるのであり、その際の主体性が自由の核にある。また、そうした価値を（拒絶するのではなく）更新する提案をする自由¹²と責任が人にはあると考えられる。普遍的な価値を前提してこそ、人は責任を担い、積極的・主体的になれるのである。

私は自分が集団の一員だと自覚したときに、主体性の意味に気がついたように感じている。集団の中の自分の役割のようなものを考え始めたら、自然と主体的に行動できるようになるのではないかと考えている。そもそもそれまでは、自分の中に正しいことをしているという確信がなかったからこそ主体的に行動できなかったのだと分析した。だからこそ、相手や集団が自分の意見に批判的である空気を出した途端、それを敏感に察知して、自分の意見を撤回していた。……主体性のない人をうまく動かすなんてできないだろうと今回の授業で確信した。つまり、集団への信頼がないことになるから、むしろ不満ばかりいう人の集まりになると思う。自分が集団の一員であることを自覚し、責任を積極的に取りに行くことで主体的な人間になることができる。そして共同体における共通善を理解することによって、正しいことを正しく実行していけるのである。この状態こそ、真の意味での自由な状態なのだと思う¹³。

普遍的な価値にアクセスしているという確信がないこと、否そもそも普遍的な価値を前提できていないことが、人を社会や他者に対して消極的にさせていたのである。正しいことを言っているという確信があれば、人は積極的になれる。

自由主義が浸透する以前の日本社会においては、「とりにいく責任」と「空気への隷従に陥らない自由」を現代よりは実現した共同体が実在したと思われる。

「個人の自由な選択」などというものがどこまであり得るのか。今の社会では、それに価値を置きすぎるの方がむしろ責任の所在をはき違えているのではないか。自分はそのような視点に立って責任の取り方を考えたい。自己責任で完結させることに問題があるのならば集団で責任をとるというのは授業内でも上がっていた案だ。言葉にしてみるとどこか漠然としているが可能だと思う。少なくとも自分が昔住んでいた場所ではそのような責任の取り方ができていたと感じる。共同生活をする上で起こった問題は集団で対話して集団で解決する。これを単なる圧や形式だけにはいけないが、上手くいっている共同体では役割意識の上に立った積極的な責任の取り方ができるはずだ。この場合の問題はそのような共同体が消えつつあること、意識的に作るのが難しい事である¹⁴。

共同体で共有する価値があたかもみずからが納得して支える普遍的価値であるかのよう

¹² この自由は、筆者が提唱してきた意味での「思想の自由」と接続する（拙稿「対話と真理」38頁以下参照）。

¹³ 2022年7月26日「哲学特講」に対する学生K.I.のリアクションより。

¹⁴ 2021年7月6日「哲学特講」に対する学生M.I.のリアクションより。

に皆に受けとめられている場合、普遍的な真理や善が前提され、構成員がそれへの責任を積極的に担い、場合によって、その価値のあり方について、構成員が積極的に関与して更新の提案をなせる状況が実現していると言うことができる。本稿がめざしているような社会は、実はわが国ではかつては実現できていたのかもしれない。ただし、そこでは共通善の安定した自明性が構成員の負担を軽減していたと思われるが、様々な価値観に容易にアクセスできてしまう現代社会においては、そのような自明性に安住することはほとんど不可能である。

それどころか、現代日本においては普遍的な価値の存在そのものを前提しないことが当然であるかのごとき風潮がある。特に若い世代においては、普遍的価値の存在を前提しないことが前提と自覚できないほどの前提となっている。わが国の以前の世代の場合も、確かにキリスト教やイスラム教のような明示的な普遍的価値が信じられていたということはなく、また、身近な共同体を超えた普遍的価値があるということに懐疑的な人は多かったと思われるが、それでも「世間」や「同世代」、少なくとも「地域共同体」や「職場」において、みずからの価値観を重ね合わせるべき比較的普遍的な安定的価値の（少なくとも）存在が、漠然とであれ、アンビバレントな関係においてであれ、想定されていたように思われる。反抗できるのも、世の中を、共同体をどこかで信じているからである。少なくとも反抗の対象の存在は認められている。この違いは決定的である。現代の若者たちは、なるほど「空気」に従うので、以前の世代が「世間」に従っていたのと同じと思われるかもしれない。見かけの行動は似ている。だから、上の世代の人たちも、少し変だと思いつつも、自分たちと同じような作法で接して一緒にやっとうこうとする。しかし、決定的違いがある。みずからが主体的にも肯定しうる共通善として空気に従っているのかどうかである。彼らにとって空気は利用するものでしかなく、従属するものでしかなく、それ自体にみずからの主体的な価値観を重ね合わせるべきものではない。自分の価値観は自分の価値観であって、空気が示す価値観とは別物であることが前提である。これが、保守的でありながら、大きな共同体へ向けての積極的関与がない理由である。

若い世代が従順でおとなしく反抗してこないことに喜んではいけない。少年犯罪が減っていることは必ずしも望ましいことではないのかもしれない。「責任」と「自由」を喪失した世代によって世の中がよいものへ変革されることを望むことは困難である。共通善の存在が自明であるような以前の幸運な共同体を取り戻すことは、現代では不可能だろう。異なる意見がいくらでも耳に入ってくる状況で共通善を維持するためには、ひとりひとりの積極的関与が重要になる。共通善、真理の存在だけは信じて、その内実が何であるかは構成員ひとりひとりが責任をもって〈対話〉し、苦心して見いだしてゆかねばならないというのが、現代社会において「責任」と「自由」を人生にとってよきものとして取り戻す唯一の道筋であるように思われる¹⁵。

¹⁵ 筆者はかつて自己決定・自己責任を積極的に評価して教育改革を構想したことがあった（『自己決定論ノート』『比治山大学現代文化学部紀要』第5号、1999年）。現在では、この構想には大いに修正を加えねばならないと自覚している。社会そのもののあり方としては、自己決定・自己責任を重視することはできない（そもそも不合理だ）し、いわゆる自由主義（新自由主義のみならず、ロールズ流のリベラリズムも含めて）は、責任や自由の構想において根本的な問題を孕んでいてと言わざるをえない。しかし、若者をよき社会人の一員に育てる過程においては、実は、自分で決めて自分で責任をとる訓練こそが、

むしろ共同体や社会に対して積極的に関わり、責任をもってそれを支える人材を育成するために有効であると考えている。

本稿では、自己責任というものを、まずいわゆる自由主義的な意味(1)(集団に対する責任と対立する意味)と集団に対する責任に包摂される意味とに区分し、さらに後者を、集団における責任を誰かに押しつけるときの「とらせる—とらせられる」自己責任(2)と、ベネディクトが言ったような集団における責任をみずから主体的に果たそうとする「とりにいく」自己責任(3)とに区別して考えてみたが、社会にとって重要な自己責任は、この最後のものである。本文で既に取り上げたが、現代社会においては、表面上、体制に反逆することなく、むしろ合わせて生きているとしても、みずからの所属する共同体を積極的に支え、そのあり方をよいものへと更新してゆこうという気がない(否むしろ、みずからが流れに逆らうことを禁忌にさえしている)人が多くなっている。そうした人は知らず知らずのうちに大勢に隷属状態にあるという点は既に指摘したが、さらに共同体にとっても、こうした構成員は望ましいメンバーではないように思われる。

主体性のない人は御しやすい、といった考えが出てきていたと思うが、私としては、主体性のない人は「御さなければならぬ」という点で寧ろ面倒な人材だと思う。他人ごとではないので偉そうには言えないが、主体性がない人というのは、言われたことしか出来ない人である。そういう人を動かすためには常に命令や行動の目的を与えておかなければいけないが、全員が忙しく動いている会社の中で、いちいちその人へ行動を命じることはかなりの手間になる。同じ能力を持っているならば、より主体性があり、言わなくても自分で動ける人の方が重用されるだろう。確かに今ある状況に批判を言わないという点では都合が良いかもしれない。しかし批判しないということは意見も改善案も言えないということで、この点でもわざわざそういう人を人的資源として重んじる理由は無いように思う(2022年7月19日「哲学特講」に対する学生Y.U.のリアクションより)。

主体性のないひとは、仕事など全般においてクリエイティビティを発揮できないのではないかと考えた。主体性のないひとは、従来のやり方に「疑問すら持てない」ことによって安寧を得ることができているのだが、するとこれを改めてみようとかもっとよくできるのではないかという発想が生まれることはない。このような唯々諾々の人間は言われたことを言われただけ行うという点で機械的であり……、突き詰めればコピー機や電卓と同等の存在になると思う(同上学生K.S.のリアクションより)。従順で、牙を挽がれた人としている方が楽でいい、また、上に立つ人にとってもその方が従え易くていい、というあり方は、うまくゆかないと思う。各人は共同体をよくするよう考える努力をするべきだ。「従順なひとを、上に立つ私が、うまく人選してうまく配置すれば、最高の集団が成り立つ」ということは、出来ないと思われる。人は、完璧ではないということを知らなければならない。だれでも、上に立つ人だって間違えるのであり、だから上の人が指示をしたときには、共同体の成員はただ従うのではなく、主体的であり、なにかあれば指摘するべきだ。だれもが完璧でないことを認め合い、それをカバーし合うために主体的な個人が集まっているのだと理解し合うことで、力のある、信頼のある共同体がつくられるのである(同上学生Y.S.のリアクションより)。

現状に疑問すら抱かずに、個人の快を追求することしか興味がない人間たちの共同体では、なにか大きな事件になるまで、世間で信じられている思想が偏り、暴走していったとしてもそれに気づくことができないかもしれない(同上学生H.S.のリアクションより)。

そうだとすれば、第三の自己責任をわが国において取り戻す営みが重要になってくる。

より良い集団主義の主体を育てるための方法として、教育段階で扱われる「自己責任(3)」があるのではないか。集団主義が根底にある社会においても、個人に主体的決定が求められる場面はいくらでもあり得るわけで、「自らの責任において」集団に対する貢献を考えさせることが教育の段階においては有効であるように考えられる。……(3)は(2)と同じく集団責任を前提としてはいるものの、自分が集団へ寄与していると信じられるポジティブさをもって「自己責任」を担えるという点で(2)とは異なる。ここで、(3)が実現する上で重要なのは、集団への信頼であるように思われる。なぜならば、集団への信頼によって、「自己責任」が集団をより良くする方向へ用いられるモチベーションが生まれるのと同時に、「もし失敗したとしても集団は自分を見捨てずに助けてくれるはずだ」と信じて自らの主体性を発揮できるからである(同上学生I.W.のリアクションより)。

「集団への信頼」は、真や善といった普遍的価値を想定することと地続きであるが、まずは身近な集団に対する信頼を取り戻し、そこを足場にして普遍的価値を追求するのが現実的なやり方であるように思

われる（いきなり地球市民になるのは困難である。マイケル・サンデルが構想しているような開かれた（対話）のある）共同体主義が最も有効な道かもしれない。共同体を信頼してもらうためには、指導的立場の人間が構成員に対して適切にふるまう必要がある。管理する側が、フォーコネ流の責任を回避することに腐心するような集団は信頼されない。みずからが主体的に共同体の価値を担い、責任をとりに行く姿を身をもって示すことが肝要であろう。

こうした観点から見た場合、昨今の学校教育の傾向は望ましいものであろうか。ここでは一例として、20年ほど前から日本中の大学に広まった、学生の成績表を大学から保護者へ送付する営みについて考えたい。これは、おそらく学費を負担しているであろう保護者に対して最も関心が高いと思われる情報を提供するのが大学の責務であると考えてのことであると見なすことはできる。しかし、まず学生（「生徒」ではない）を一人の人格としてとらえた場合、自由主義的に考えれば、この営みは大きさに言えば人権侵害とも見なしうる事柄である（だからこそ、各大学は、法律家に相談したり、本人ないし保護者の「同意」をとっているという体裁を整えようとやっきになっている。また、名目上の保護者が必ずしも経済的、精神的に実質的な保護をしているとはかぎらないという問題もある）。本稿では、自由主義を前提した議論は脇へ置き、この営みが、よき共同体の構成員が身につけるべき「とりにいく」自己責任を養う上で効果的なのかどうかを考えてみたい。

大学からの保護者への成績送付は、学生の心性において「自分は親の庇護下にあつて、自己決定を果たせる主体ではない」という意識を生むため、(3)の自己責任に則って考えてもあまり適切ではないように思われる。現代の大学生における、「まだ自分は一人前の主体でないから自己決定＝自己責任は果たせない」という意識はおそらくここ数年言われ続けているように思われるし、耳の痛いところではあるが、独立した主体であるという意識を学生が持つためには、形の面からできるだけ大学からの保護的な働きかけは少なくあるべきであると思う（同上学生I.W.のリアクションより）。人間の場合でも、親やその他の人から褒められるからやる、叱られるからやらないといった側面は確かにある。しかし、褒められるからやる、褒めてくれないからやらないという次元でしか動かない人間は、一定程度自律した営みもできる存在とは言えない。ましてや社会に対して積極的提言をすることはできない。或る程度自律した営みを経験するためには、褒められる叱られるという要素を度外視して自分で決定できる状況を確保しなければならないだろう。

成績送付の件について、「親に見られる」という意識を持ちながら勉強するのか、それなしで、自分のために自分で頑張るのか、ということは全く違う。自分で自分をマネジメントできるようになるための最後の訓練の機会ではないのか、という意見。賛成（同上学生R.O.のリアクションより）。

こうしてみると、成績送付という営みは、よき共同体の構成員を育成するという点から見ても、得策ではないように思われる。ましてや、大義名分はともかく、大学が成績を送付する一番の実質的理由は、親のクレーム等が増えてきた昨今の情勢に対する自己防御という意味合い、親に学生の学修の面倒を見てもらいたいという大学の責任転嫁の意味合いがあるのではないかと勘ぐられても仕方がない側面もあり、ますます学生は大学を信頼しなくなる恐れもある。親も大学も自分を一人の自律した人間と見なし対峙してくれているという意識が、学生の自律的な責任感を育てるのではないだろうか。

成績送付が始まったのと同じ頃に学生の様子ががらりと変わったと筆者が感じた年度があった。その年度以降、見かけ上、礼儀正しく、慇懃な態度をとる学生が増えたのだが、ちょっと圧力を加えようと、手のひらを返したように、「何だおまえ、話が違わないか」といった表情で逆ギレする学生が目立つようになったのである。若者らしい率直さが消え、本心で話し合えてる気がしなくなった。調べてみると、ちょうど「関心・意欲・態度」なる観点の評価が導入された学生たちであった。数年前に学生たちにこの話をした際、「あの評価は前はなかったんですか！あれがあるから生徒たちは装うんです。あれのために生徒は変わってしまいます」と率直に感想を吐露してくれる学生がいた。近年、「主体性」評価なるものが導入されようとしているが、これがまるで逆効果であることを教育関係者は肝に銘じなければならない。

成績送付とほぼ同時期に全国の大学に広まった制度として、履修登録単位数の上限設定もある。この制度が文科省から指示された時期は、日本の大学にも早期卒業の制度を導入しようとした時期と重なっており、筆者の分析では、以下のような事情があったと推察可能である。当時の大学では、4年次にしか履修できない卒論等の一部の単位を除いて、ほとんどの卒業に必要な単位を3年次までに修得済みの学生が大半を占める状況があった。この状況下で早期卒業の制度を導入すると大半の学生の早期卒業を認

「善なるもの」「真なるもの」を想定し、そこへと接近していくための行為であるという点で、「共同体における責任を伴うような行為」と「哲学対話」とは同じ構造を持つ¹⁶。

* 本稿の第1、2節は齋藤雅俊氏の著作と重なる内容をもつし、3節以降は学生のリアクションを中心に展開されているので、本稿は筆者の「オリジナルな学術論文」とはとても言い難いものである。しかし、全体を通しての内容はぜひ記録しておきたいものであった。〈対話〉を有意義に展開してくれた学生たちに感謝の意を表したい。

めねばならない。日本の大学生は国際的に見てそれほどまでに優秀なのか。そうではない。単に単位認定が甘いだけである。しかし、ここを改善することは困難なので、そもそも履修登録できる単位数を制限して体裁を取りつくりおおうというのが、文科省の秘策であったと思われるのも仕方ない出来事が、履修登録単位の上限設定であるように思われるのである。

この推察が当たっているかどうかはさておき、少なくとも、この制度が学生の自律的なマネジメント能力の育成の機会を減少させたことは確かであろう（また、教師が本当の意味で成績評価の実質的な（単に出席や提出物等の形式を重んずるやり方ではなく）厳格化へと精進する機会もなくなった。文科省の留年者数管理が厳しい（交付金に影響する）以上、日本の大学教員はますます単位を落とせなくなったからである）。

昨今の大学一年生に対しては、まことに懇切丁寧なオリエンテーションが行なわれる。筆者が大学へ入学したときには、オリエンテーションもクラスも担任もなく、薄く小さい学生便覧を一冊ぼんと渡されただけで後は放置された。掲示板を見ても、情報に不整合・不足があるし（当時の事務はけっこう適当であった）、もちろんインターネット等もないので、一人で明日から何をすればいいか見いだすことは不可能な状況に追い込まれた。高校生までは現代の若者に劣らず依存的な人間だった筆者は、はじめて自分から友人をつくって情報交換し、事務局で情報の不整合・不足を問い直し（自分から問い合わせれば、間違いを訂正し、追加情報を教えるなど、ちゃんと対応してくれる）、全く「自分の責任」で情報を統合して明日からの方針を決めた。最初とても不安だったけれども、自分で動いて自分にとって必要だと思う情報だけを集め、また主体的に人と共同してゆくことは、とても風通しがよく、自分の自信にもなり、生まれて初めて「自律＝社会化」したという実感を得たことを明確に記憶している。社会に対して内向きの人間を変えるものは、お仕着せの〈つながり〉ではなく、本人自身が内発的に動かざるをえない状況である。受け身で済んでしまうような制度を撤廃すること、これが何より重要なことであるように思われる。そのような貴重な状況が現代の大学生からは奪われていることは、学生の自律にとって、そして、よき社会にとって、とてもマイナスであるように思われる。その上、学生に対する懇切丁寧な対応のために教員も事務も疲弊している。一体何のための疲弊なのだろうか。学生の自律の機会を奪っていることも問題であるが、懇切丁寧なオリエンテーションや学生支援が、何かあったときに責任を問われないための、アリバイ作り、責任回避の側面をもっているとするれば、共同体に対する学生の信頼を損ない、ますます自律する勇気は培われないのである。責任回避は連鎖し、人の自律を阻害し、社会を劣化させる。この点を肝に銘じる必要がある。

「成績くらいは保護者に伝えたって良いじゃないか」「オリエンテーションは行うけれど、最後は自分で決めるのだから良いではないか」という反論も考え得るが、真に最小限の動きかけのみにして「主体的にならざるを得ない」環境を用意する方が適切な手段なのではないか（同上学生 I. W. のリアクションより）。

¹⁶ 2022年7月26日「哲学特講」に対する学生 Y. S. のリアクションより。

Responsibility and Freedom —— Liberal Society and Slavery ——

Yoshishige HIGAKI

In a liberal society people do not assume universal values. Liberalism denies the existence of the common good. This denial, at first glance, seems to give people freedom.

However, people cannot swim against the tide of the society. Nevertheless, if they have their own sense of values that differ from the values of the social tide, they cannot hope that their sense will be accepted by everyone. They only follow the tide of the society, because they do not believe in the existence of universal values.

It seems to me that people have freedom only when they assume universal values, put their own values on them, and take responsibility for the universal values.